

| | |
|---------------|---|
| Title | ウルドゥー近代詩の形成：ハーリー「詩序論」について |
| Author(s) | 松村, 耕光 |
| Citation | 大阪外国語大学学報. 70(2) p.1-p.15 |
| Issue Date | 1985-11-30 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/81069 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ウルドゥー近代詩の形成

—— ハーリー「詩序論」について ——

松村耕光

The Formation of Modern Urdu Poetry

— A Study of Alṭāf Ḥusain Ḥālī's "Muqaddimah-e
Shi'r-o-Shā'irī" (Introduction to Poetry) —

Takamitsu Matsumura

Alṭāf Ḥusain Ḥālī (1837—1914) is one of the leading poets who made great efforts to reform Urdu poetry after the "Mutiny." This paper aims chiefly at analysing Ḥālī's famous essay on poetry, "Muqaddimah-e Shi'r-o-Shā'irī" (Introduction to Poetry), which played an important part in the formation of modern Urdu poetry.

The contents of this paper are as follows:

Introductory remarks

I. A biographical sketch of Alṭāf Ḥusain Ḥālī

II. A study of "Muqaddimah-e Shi'r-o-Shā'irī"

(a) Poetry, society and morality

(b) Requirements for a good poet and for good poetry

(c) Reformation of Urdu poetry

Concluding remarks

Appendix: A Japanese translation of Ḥālī's poem "Shi'r ki ṭaraf khiṭāb"

(Addressing a poem)

小序

いわゆる「インド大反乱」以後、インドの政治・社会は大きな変動の時期を迎えるに至った。文学もまた例外ではなかった。ナズィール・アフマド (Nadhīr Aḥmad 1836 ?—1912) による近代的な小説の創作・発表、ムハンマド・フサイン・アザード (Muḥammad Ḥusain Āzād 1832—1910) や

アルターフ・フサイン・ハーリー (Altāf Husain Ḥālī 1837—1914) による近代詩運動等によってウルドゥー文学は新しい展開を見せるようになる。

本稿においては、ウルドゥー近代詩の形成期に重要な役割を果たしたハーリーを取り上げ、近代詩運動のマニフェストともいべき彼の「詩序論」(Muqaddimah-e shi'r-o-shā'irī) について紹介・考察してみたいと思う。

I

まず、ハーリーの生涯を簡単に紹介しておくことにしたい。(ハーリーは「現代的、当世風」という意味の雅号である。)

ハーリーは古戦場として有名なバーニーバトに1837年に生まれた。父は東インド会社の事務員であった。¹⁾ 9才の時、父が死去。ハーリーを生んだ後狂人となっていた母も間もなく死去。かくしてハーリーは、兄や姉によって育てられるようになる。(ハーリーは末子で、兄一人、姉二人がいた。) 17才の時、兄姉の強い勧めで結婚するが、勉学意慾に燃えるハーリーは結婚生活を嫌い、単身、誰にも知らせることなくデリーへ向かう。そしてマドラサ(宗教学校)で勉学に励むようになる。²⁾

一説によると、この最初のデリー滞在期にハーリーは、詩人ミルザー・アサドゥッラー・カーン・ガーリブ (Mirzā Asadullāh Khān Ghālib 1796—1869) の知遇を得たようである。

ハーリーは、1901年、請われて短い自伝を書いているが、³⁾ これによると、ハーリーはガーリブの許をよく訪れ、ガーリブのウルドゥー、ペルシア詩の難解な詩句について質問したり、ガーリブが作ったペルシア語のカスィーダ (qaṣīdah 頌詩) の説明を受けたりしている。また、自伝によると、或る日、ガーリブに自作のガザル (ghazal 定型抒情詩) を見せるとガーリブは、「ねえ君、私は、普通、詩を作れとは誰にも言わないのだが、君の場合、もし君が詩を作らなかったら、それは自分の才能を虐待していることになるよ」と言ったという。

1855年、デリー滞在1年半でハーリーは兄に見つかり、帰郷しなければならなくなる。翌年、ヒサールで事務員となり、家の者を安心させたが、それも東の間、1857年の「大反乱」で帰郷を余儀なくされる。

4年間、家で読書や学習の日々を送った後、ハーリーは職を探しにデリーに赴く。

1863年、ハーリーは詩人ナワーブ・ムスタファー・カーン・シェーフタ (Nawāb Muṣṭafā Khān Sheftah 1806—1869) と知り合い、その子供たちの家庭教師となる。

ハーリーはシェーフタと共にウルドゥー語やペルシア語のガザルを作り、ガーリブの指導を仰いでいたが、ハーリーはガーリブよりもシェーフタから多大の影響を受けた。自伝の中で彼はこう書いている。

「当時、ウルドゥー語やペルシア語のガザルをよくナワーブと一緒に書く機会を得た。ナワーブと共にジャハーンギーラーバード(ここにシェーフタの領地があった。—引用者註)から自分の作

品をミルザー・ガーリブの許に送ったものであった。しかし、実のところ、シルザーの助言や添削はあまり私の役には立たず、役に立ったのは故ナワーブとの交際であった。ナワーブは誇張を嫌い、真実や事実の叙述に面白味を生み出すこと、そして単純明快な事柄を叙述の美しさだけで魅力的なものとするを詩作の究極と考えていた。低級で野卑な単語や熟語、そして低俗な発想をシェーフタもガーリブも嫌っていた。…（中略）…シェーフタの考え方の影響が私にも及び始め、次第に一つの独特な嗜好が生み出されるに至った。」

ハーリーは、約8年間、シェーフタの庇護の下でその詩才を開花させていたが、1869年、ガーリブ、シェーフタの二人が相次いで死去してしまう。それでハーリーは、ラーホールに赴き、パンジャープ州政府出版局（Punjab Government Book Depot）で、英語文献のウルドゥー語訳の訳文を推敲・是正する仕事をするようになる。英語をほとんど解さないハーリーにとって、この仕事は西欧の文芸に触れるきわめて貴重な経験となった。

「約4年間、私はこの仕事をラーホールで行なったが、これによって英文学に或る程度まで親しむようになり、無意識の内に、次第に東洋文学、特に一般のペルシア文学に対する尊敬の念が心から消えてゆき始めた。」（自伝）

以上の述懐は、英文学から受けた影響の深さを明白に表している。

英文学との接触の他、従来とは異なる新しい方式の詩会（mushā'irah）に参加する機会を得た点でも、ラーホール時代はハーリーの一生にとって非常に重要な時期となった。

1874年、社会・文化改革団体、パンジャープ協会（Anjuman-e Panjāb 1865年設立）は、M. H. アーザードや当時パンジャープの学校教育局長（Director of Public Instruction）であったホルロイド（Holroyd）の指導の下に詩会を催した。この詩会は毎月開催されたが、その目的は、ハーリーの言葉を借りるならば、「全く恋愛や誇張の支配下にあるアジアの詩を、可能な限り広汎なものとする⁴⁾こと、そしてその基礎を事実の上に置くこと⁴⁾」であった。この目的を達成するために、パンジャープ協会主催の詩会は、従来⁵⁾の詩会とは異なる方式を採用した。すなわち、従来⁵⁾の詩会では予め与えられた半句（miṣra'-e ṭarah）に基づいてガザルを發表することになっていたが、この新しい詩会では、与えられた主題についてナズム（nazm ガザル以外の詩）を發表することに決められた。このパンジャープ協会が指導した新詩運動についてハーリーは次のように記している。

「この運動がもし15年早く起こっていたら、恐らく何の実も結ばなかったことであろう。何故なら、ウルドゥー詩に対して多かれ少なかれ才能を持っていたインドの人々は、恋愛の主題を重視するあまり、詩を恋愛と同一視してしまっており、誇張を詩の本質に属するものと考えていたからである。彼らは写実や事実の描写を詩の目的に反するものと考えていた。彼らは、詩の基礎を置くに値するような、西欧の表現様式のどのような見本も自国語の中に見出さなかった。しかし、この運動は、幸運にもウルドゥー語に西欧の思想が吹き込まれつつあった時代に起こったのであった。」⁵⁾

パンジャープ協会が催した詩会は盛況であったが、長続きしなかった。しかし、ウルドゥー詩は、引用文の中にもあるように、西欧の影響を受けつつ、大きな変貌を遂げてゆく。

ハーリーはパンジャブ協会主催の詩会に4回参加し、「雨期」(Barkharut)、「希望の喜び」(Nashāt-e ummīd)、「愛国心」(Ḥubb-e waṭan)、「慈悲と正義との論争」(Munāzarah-e raḥm-o-inṣāf)の4篇の詩を発表して好評を博したが、詩作に励む一方、ハーリーは1874年に『婦人の集い』(Majālis al-Nisā)と題する本も著わしている。内容は、婦人教育の必要を許える改革主義的な物語である。この本は教科書として各地で使われた。⁶⁾

同年、ハーリーは健康を害し、ラーホールを去り、デリーのアングロ・アラビック・スクール(Anglo-Arabic School)のアラビア語教師となった。

19世紀後半、インド・ムスリム社会は様々な改革運動の波に洗われていた。この時代、特に重要な役割を果たしたのはサイイド・アフマド・カーン(Sayyid Aḥmad Khān 1817—1898)である。⁷⁾ 彼は対英協調を説くとともに、イスラームの近代化、西欧文化の摂取を訴えてインド・ムスリムに多大の影響を及ぼした。「大反乱」の後、アフマド・カーンはイギリスとムスリムの調停者、啓蒙主義者としての活動を開始するが、このインド・ムスリムの福沢諭吉とも言うべき人物の活動が本格化するのには、1869年から翌70年にかけてのイギリス視察旅行以後である。

1870年、アフマド・カーンは、18世紀イギリスに大きな影響を与えた雑誌『タトラ』や『スペクテーター』を真似て雑誌『倫理の浄化』(Tahdhīb al-Akhlāq)を発刊し、これによって啓蒙活動を推進すると同時に、ムスリムのための近代的高等教育機関の設立を準備し始めた。インド政府の援助やイギリス人、ムスリム上流階級の寄付によって、1875年、アリーガルの地にムハマダダン・アングロ・オリエンタル・カレッジ(通称アリーガル・カレッジ)がまず小学校として開設された。このカレッジは、78年に予科、81年には学士課程を開設し、着実にインド・ムスリム的高等教育機関としての地歩を固めていった。(1920年、大学に昇格し、アリーガル・ムスリム大学となる。)さらに、アフマド・カーンは、教育問題や社会問題を討議するために、1886年、ムスリム教育会議を設立した。

アリーガルを拠点にして展開されたムスリムの一大改革運動は、普通、アリーガル運動と呼ばれており、ハーリーはこの運動の重要な担い手であった。⁸⁾

ハーリーは、1864年から69年までの間の時期に、シェーフタの仲介でアフマド・カーンと会ったようである。⁹⁾ ハーリーの著作の中で初めてアフマド・カーンの名が現れるのは、1871年、『アリーガル・インスティテュート・ガゼット』に発表された「サイイド・アフマド・カーンとその業績」というエッセイである。¹⁰⁾ このエッセイの中で、ハーリーはアフマド・カーン支持の立場を明らかにしている。

1879年、ハーリーは有名な六行詩「イスラームの盛衰」(Madd-o-jazr-e Islām)を発表するが、¹¹⁾ この詩はアフマド・カーンの圧倒的な影響下に書かれたもので、イスラーム出現以前のアラビアの状態の描写から始まり、イスラームの登場とムスリムの発展、そして近代におけるムスリムの衰退ぶりが感動的な筆致で描き出されている。「親愛な友人たちの自尊心や羞恥心を喚起するために」¹²⁾ 書かれたこの六行詩は大きな反響を呼び、ハーリーは詩人としての地位を不動のものとした。1886

年には増補版が発表された。

1887年、ハイダラーバード藩王国から年金を得るようになったのを機に、ハーリーはアングロ・アラビック・スクールを辞め、1889年、パーニーパトに帰郷、著述や旅行など多忙な日々を送るようになる。1904年、優れた学者、文学者に与えられる称号 Shams al-Ulamā を政府より授与された。1907年にはムスリム教育会議カラーチー大会の議長を務めた。1914年12月31日、故郷パーニーパトにて死去。詩人ハーリーは近代ウルドゥー散文の確立者でもあり、数々のエッセイの他、次のような著書がある。

『婦人の集い』（既出）

『サアディー伝』（Ḥayāt-e Sa'dī 1886年）

『ガーリブ追憶』（Yadgār-e Ghālib 1897年）

『永遠の生命』（Ḥayāt-e jāvid 1901年 アフマド・カーンの伝記）¹³⁾

II

「詩序論」は、1893年、『ハーリー詩集』（Diwān-e Ḥālī）に付されて発表され、後に独立した本となった。¹⁴⁾ 約200ページあり、前半は理論的、後半は具体的な内容である。章には分けられておらず、70近くの小見出しが付けられている。以下、重要な点をいくつか取り上げ、紹介・検討することにした。

a) 詩 社会 道徳

ハーリーは、詩の社会に対する影響力についての議論から「詩序論」を開始している。ハーリーは、詩については賛否両論があるが、詩は無益なものではないと述べ、「ヨーロッパでは、政治的困難の時、昔から詩は民族を奮い立たせる強力な手段と考えられてきた」ことを実例を挙げて説明している。ヨーロッパの例だけでなく、アラビアやペルシアの例も引いている。また、ハーリーは、文明や科学が進歩すれば詩は衰退するという考え方を批判し、文明や科学の進歩の度合に関係なく、詩は社会に対して影響を及ぼすことができると主張している。

詩の社会的有用性を説くハーリーが、詩の道徳性を重視するのは当然と言えよう――

「詩は、直接には倫理学のように説教を垂れたりもしないが、倫理学の代理物、代替物と言っても良いであろう。」

もっとも、ハーリーは詩人に向かって道徳を説く説教者になれと言っているわけではない。彼は詩人と説教者とを明確に区別して考えていた。『ハーリー詩集』の序文の中でハーリーはこう書いている。

「詩人に説教者の地位を与えることはできない。説教者の目的は直接的な忠告、指導である。ところが、詩人の真の目的は人間本性の探究、世界の出来事に影響されて生じた感情の高まりを表出すること、これだけである。詩人は誰かを諭すために叫ぶのではなく、自分で何かを理解して叫ぶ

のである。」

このように、ハーリーは説教を詩の第一義的な目的とは考えておらず、したがって、ハーリーの詩論を浅薄な改革主義や功利主義の産物として片付けることはできないのであるが、詩の主題が何であれ、詩は社会に奉仕するものでなければならぬと彼が考えていたことは確かである。¹⁵⁾

ハーリーは、詩が社会に影響を与えるだけでなく、逆に、社会の影響を蒙ることをも明確に認識していた。彼は次のように述べている。

「社会の思想、意見、慣習、願望、傾向、嗜好が変化するにつれて詩の状態も変化する。この変化は全く意識されることがない。何故なら、詩人は社会の状態を見て意識的に詩風を変えるのではなく、社会とともに自ずと変化してゆくものだからである。」

ハーリーは、アッバース朝以降、ムスリムの詩は墮落の一途を辿ったと考えているが、彼によれば、詩の墮落の元兇は宮廷であった。賛美や報酬を望んで、宮廷のスルターンや貴族に取り入ろうとした詩人たちは、自然な感情を自由に表現することを止め、嘘や誇張をも辞さなくなってしまった、とハーリーは言う。彼に従えば、詩の主題も限定されたものとなってしまう、残ったのは支配者を賛美する詩と恋愛詩だけである。これらに厭きると滑稽な詩が作られるようになった。その後、創作意欲は減退し、主題のみならず、言葉、喩、リズム等に至るまで前代の詩の模倣が行なわれるようになってしまった…。

このようにハーリーは詩の墮落の歴史を跡付け、そして詩と社会の相互関係について次のように述べている。

「詩をまず社会の墮落した嗜好が頹廢させるが、頹廢するとその悪風は社会にもきわめて大きな害を及ぼす。」

ハーリーの考えによれば、墮落した詩、偽の詩の特徴は嘘と誇張である。このような詩が社会全体に流行すると、人々の心は真理や事実から離れてしまい、普通でない話、超自然的な物語やあり得ないような主題に心を奪われるようになってしまう。こうして「密かに、しかしきわめて強固に悪徳が社会に根付き、嘘と並んで滑稽さも詩の素材の中に加えられると、民族の道徳は全く頹廢してしまう。」

また、詩の墮落、詩の内容の制限は文学、言語の破壊をももたらすとハーリーは言う。何故なら、著述、演説、日常会話、いずれにおいても規範となっているのは、詩で用いられた言葉だからである。詩の墮落によって品のない単語が使われるようになり、また、詩題の制限は詩の模倣を招く。こうして文学、言語は活力を失ってしまうのである。

ウルドゥー詩の状態に対するハーリーの不満や失望をよく示す「イスラームの盛衰」中の詩句を次に引用しておくことにする。

Voh shi'r aur qasāid ka nā-pāk daftar

'Ufūnat meṇ sanḍās se jo hai badtar

Zamīn jis se hai zalzalē meṇ barābar

Malak jis se sharmātē haiṇ āsmān par
 Huā 'ilm-o-dīn jis se tārāj sārā
 Voh 'ilmoṇ meṇ 'ilm-e adab hai hamārā

Burā shi'r kahnē ki gar kuchh sazā hai
 'Abath jhūtṭ baknā agar nā-rawā hai
 To voh maḥkamah jis ka qāzī khudā hai
 Muqarrar jahān nek-o-bad ki sazā hai
 Gunahgār wān chhūt jāengē sārē
 Jahannam ko bhar dēngē shā'ir hamārē
 あの詩と頌詩の不潔な作品群
 それらの臭気は便所より鼻を突く
 大地はそれらのために地震のような有様
 天上の天使はそれらのために赤面する
 学問や宗教を穢したもの
 それこそは我々の文学という代物

悪い詩を作ると何か罰があり
 馬鹿げた嘘をつくのが不正であるならば
 神が裁判官であり
 善悪の報いを定めている裁判所から
 罪人たちはみな解き放たれ
 我らの詩人たちは地獄を一杯にすることだろう

詩の改革は如何にして可能であろうか？ ハーリーはこう答える。優れた作品を生み出すこと、そして詩の本質や詩人となるための要件を論じることが心要である、と。六行詩「イスラームの盛衰」をはじめとする一群の詩によって、近代詩の何たるかを実例をもって人々に示してきたハーリーは、「詩序論」において理論的に詩の改革を図ろうとするのである。

b) 詩人及び詩の要件

ハーリーは優れた詩人となるための要件を三つ挙げている。
 第一の要件は想像力である。想像力を豊富に持っていれば持っている程良い詩を書くことができ、これがなければ詩人にはなれない、とハーリーは述べている。彼によれば想像力は生得の資質であり、学習によって獲得できるものではない。ハーリーに従えば、想像力とは、経験や観察を通じて頭の中に蓄えられている多くの知識を配列し直し、新しい形にする力、そしてそれを普通の形式と

は多かれ少なかれ異なった、魅力的な言葉の形式に整えるような力のことであり、「想像力の作用と影響は、詩想と同様、言葉にも及ぶ」のである。このように考えるハーリーが、想像力を詩人の第一の要件として挙げたのは当然であったと言えよう。

嘘と誇張を嫌悪するハーリーは、言うまでもなく、想像力が放恣に流れることを厳に戒めようとする。無制限に高く飛翔しようとする想像力の動きは、分別によって制限されなければならないのである。

「想像力が如何に勇敢で大きな飛翔力を持っていようと、分別の下にある限り、詩は何ら害を蒙らない。それどころか想像力の飛翔が高ければ高い程、詩は高度な段階に達するのである。」

第二の要件は世界の観察である。

「詩人の知識の範囲がきわめて狭く、限られたものであったとしても、想像力はそのわずかな蓄積の中からでも何らかのものを引き出すことができる。しかし、詩作において完成の域に達するためには、世界、特に人間本性の観察を非常に注意深く行なうことが必要である。」「想像力は素材なしでは如何なる物も生み出すことができない。想像力は外部から得た材料を用いて新しい形を彫り出すのである。」

第三の要件は言葉の吟味である。

これに関してハーリーは、「詩作にあたっては、まず適切な言葉を選出すること。次に言葉と言葉を、詩句の意味を理解する際、読み手に混乱が生じたりしないように、そして詩想の映像がそのまま目の前に現われるように結び合わせること。にもかかわらず、その結合には読み手を魅了してしまうような魔力が潜んでいること」が必要であると述べている。

先程見たように、ハーリーの考えでは、想像力は詩想のみならず詩の言葉をも支配するのであるが、ハーリーによれば、「想像力のみではどうすることもできない」のであり、詩人は言語に習熟する努力、詩作に際しては忍耐強く言葉を選定する努力を怠ってはならないのである。

以上のように考えるハーリーは、即座に、自然に口を突いて出た詩こそ味わい深いとする一般の傾向に反対し、推敲を重ねた詩を高く評価する—

「例外的な場合を除いて、より人気を博し、快くて味わいがあり、深みがあって感動的なのは、常に、考えに考え抜かれて作られた詩である。」「或る詩が自然で、amad（自然に詩句を思い付くことをamadと言う。この反対はawardと呼ばれる—引用者註）であると思われれば思われる程、それは多大の労苦、注意、推敲を要したと思わなければならない。」

詩人の要件に次いで、ハーリーは優れた詩の要件に論を進める。彼はミルトンの「詩の美点とは、平易であること、情熱に満ちていること、そして真実に基づいていることである」という言葉を紹介し、これら三つの詩の美点を優れた詩の三要件として論を展開してゆくのであるが、興味深いことに、ミルトンはこのようなことを述べてはいない。これに類似した言葉はミルトンの“Tractate of Education”というエッセイ中に見出される。しかし、そこでは、詩はレトリックよりも simple, sensuous そして passionate である、と述べられているだけである。コールリッジはミルトンのこの

言葉を詩の定義として重視しており、恐らく、コールリッジの見解が何らかの形でハーリーに影響を及ぼしたのであらうと思われる。

さて、優れた詩の三要件について一つずつ見てゆくことにしよう。

平易さ (sādagi) についてハーリーはこう述べている。平易さというのは相対的なものであり、普通の人が平易であると思えばそれでよい。誰にとっても平易な詩というのはあり得ない、と。もっともハーリーは、平易さの一応の基準を次のように定めている。

「詩想は、如何に高尚で深遠であらうと、入り組んでいたり、斑^{むら}があつたりしてはならない。そして言葉は可能な限り日常会話の言葉に近くなければならない。」

また、ハーリーは、次のように、平易な詩と低俗な詩とを区別するよう注意を促している。

「我々の観点からすると、痩せ衰えてしまったような平易さを平易さの中に含めることは、平易さの名を辱しめることに他ならない。その種の作品は、平易な作品ではなく、低俗な作品と呼ばれるであらう。」

情熱 (josh) に関してハーリーはこう述べている。

「情熱とは、詩人が自分の意志で詩想を詩にしたのではなく、詩想の方が詩人をして詩を作らしめたと思われる程、詩想が自然な言葉、感動的な形式で表現されていることを言う。」「情熱とは、詩想がきわめて力強く、情熱的な言葉で表現されていることを意味するのではない。言葉が柔らかで穏やかであっても非常な情熱を秘めていることがあり得る。」

真実 (aşliyat) に基づくことという要件については、ハーリーは次のように書いている。

「真実に基づくことというのは、何も各詩句の内容が万人の認める事実に基づいていなければならないということではない。それは、詩句の基礎となっているものが、現実において、人々の信念において、また、詩人の頭の中だけにいても実際存在しているものであるということ、あるいは、詩人の頭の中には実際存在していると思われるようなものであるということの意味する。さらに、真実に基づくことというのは、叙述において真実から少しでも離れてはならないということではなく、できるだけ多くの真実が必要であるということである。」

嘘と誇張を厳しく批判するハーリーではあるが、以上のように、真実性に関する彼の考え方は非常に柔軟であり、単純な写実主義を説こうとしたのではない点に注意しておかなければならない。

一般的な説明の後、ハーリーはアラビア語、ペルシア語、ウルドゥー語の詩を引用して、具体的に「ミルトンの三要件」を説明している。三要件を全て満たしているとハーリーが言うウルドゥー語の詩句を二つ訳出しておく。

Ab to ghabrā ke yeh kahtē haiñ keh mar jāengē

Mar ke bhī chain nah pāyā to kidhar jāengē

死にたいと狼狽^{うろた}えて言っているが

死んでも安らげなければ何処¹⁶⁾へ行く (ゾウク)

Khushī jīnē ki kyā marnē ka gham kyā

Hamāri zindagī kyā aur ham kyā

生の喜びが何だ 死の悲しみが何だ

我々の一生など何だ 我々など何だ (ガーリブ)

尚、ハーリーは、真実性がなければ詩は情熱的なものとはならないから、情熱的なだけの詩や平易で情熱的だけれども真実性がない詩などというのは考えられない、と述べている。

c) ウルドゥー詩の改革

「詩序論」後半は、詩の具体的な改革指針の提示に当てられている。

(1) 才能の必要

詩人としての資質があるかどうかを見極めることがまず必要である、とハーリーは述べる。この指摘は、才能の有無にかかわらず詩作していた当時の人々に対する批判であろう。

(2) 嘘や誇張を避ける

アッバース朝以降、嘘や誇張が増加し、そのために詩は墮落した、と見るのがハーリーの基本的な観点であり、したがって、嘘や誇張は厳しく排斥される。嘘は感動を全く引き起こさないし、また、人々の知的進歩は嘘の詩を減ばすであろう、とハーリーは述べている。

これに関連してハーリーは、当時よく使われた「ナチュラルな詩」(nēchural shā'irī)という言葉について説明している。

ハーリーは、この言葉は二通りに誤解されて使われていると言う。一つは、「ネーチュリー」(nēchri)の宗教思想の説かれている詩、とする誤解である。「ネーチュリー」とは、自然主義者、物質主義者、無神論者という意味で、アフマド・カーンやその信奉者を指す。アフマド・カーンは非常に合理主義的な宗教思想の持ち主であったので反対者によってこのように呼ばれたのである。第二の誤解は、或る民族や宗教集団、特にムスリムの進歩や衰退の様子が描写されている詩と解するものである。ハーリーによれば、「ナチュラルな詩」とは、言葉、意味両方の点において自然の理や慣行に適っているような詩のことである。それは、常に世界で起こっていること、起こるのが当然なことを普通の言葉で表現した詩を意味する。このような「ナチュラルな詩」こそハーリーが理想とする詩である。

(3) ウルドゥー語を正確に使用すること

ウルドゥー語は、他のインド諸語に比べて包括的で思想表現に適しており、インド全土で通用するから、ウルドゥー語をインドの国語にすべきであるとハーリーは主張する。また、ウルドゥー語程詩作品の蓄積のある言語はインドには他に見当たらないから、詩作しようとする者はウルドゥー語を用いるように、とも述べている。

以上のように主張するハーリーではあるが、彼は決して狭量なウルドゥー語至上主義者ではなかった。彼は、アラビア語、ペルシア語は言うに及ばず、ヒンディー語の学習をも奨励しているのである。

「ウルドゥー語に熟達するためには、デリーやラクナウの言葉を真似ているだけでは十分では

ない。アラビア語やペルシア語の少なくとも中級程度の力を身に付けておくこと、さらにヒンディー語を或る程度まで習得しておくことが必要である。」

ハーリーによれば、ウルドゥー語は、ヒンディー語を基礎として、アラビア語、ペルシア語の影響を受けて成立したものであるから、ヒンディー語を全く知らずにアラビア語、ペルシア語だけに頼って詩作しようとする詩人は、「車輪のない車を目的地まで運ぼうとする者」であり、逆に、アラビア語、ペルシア語を知らず、ヒンディー語やその他の母語にのみ依拠する詩人は、「牛のつながれていない車を押す者」に他ならないのである。

ところで、ウルドゥー語の正確な使用という点についてであるが、この点についてもハーリーは非常に柔軟な考え方を示している。ハーリーに従えば、一般人や無教養な人々の言葉の誤用は是正されなければならないのであるが、教養のある者もない者も一様に誤用している言葉は改める必要がないのである。必要以上に言語を正確に使用しようとする生き言葉から遊離してしまうので、ハーリーは無用の完全主義を斥けようとしたのであった。

(4) 詩興が湧いた時に詩作すること

外的事情のために詩作するのは詩の墮落につながるので、ハーリーはこれを禁じようとする。

(5) ガザル、カスィーダ、マスナヴィーの改革案

「詩序論」約200ページの内、約100ページにわたってハーリーはガザル、カスィーダ、マスナヴィー (mathnavī 主に叙事詩に用いられる詩形) の改革案を細かく提言している。¹⁷⁾ 紙幅が限られているので、ここでは、ガザル改革案だけに絞って、その内の重要な点をいくつか検討しておくことにしたい。

ガザルはウルドゥー詩の中で最も好まれた詩形で、恋愛が中心的な主題であった。¹⁸⁾ (現在でも非常に愛好されている。) このようなガザルについて、ハーリーは、まず、主題を男女の恋愛だけに限定することなく、人間の神に対する愛や親子の愛、兄弟愛、夫婦愛など様々な愛を歌うべきであると説く。

次いでハーリーは、愛だけでなく、他の感情や思想も歌ってガザルの主題をできる限り豊富にしなければならないと主張する。この主張は、事実上、ガザルの伝統の否定である。改革によってガザルの魅力が失われてしまうことをハーリーは十分承知していたが、彼によれば、「建物が改築されるか、建物自体がなくなってしまうかのいずれかであると時代は大声で叫んでいる」のであり、ガザルの改革は焦眉の問題なのであった。

ガザルのみならず、ウルドゥー詩全体の発展を図るために、ハーリーは、ウルドゥー文学以外にも目を向けるよう提言している。ハーリーによれば、ペルシア語にはほとんどないが、アラビア語には多くの、英語には非常に多くの高尚で興味深い思想、素晴らしい思想があるから、それらを吸収するように努めなければならないのである。また、ハーリーは、サンスクリットやヒンディー語からも思想を吸収するのを怠ってはならないとも述べている。

革新的で偏見のないハーリーの見解は、次の言葉によく表われている。

「我々もまた、我々の眼前にある如何なる民族や言語の思想からでも、できる限り利益を引き出さなければならない。数世紀来ずっと言われ続けてきた、あのいくつかの古色蒼然たる思想に満足してはならない。何故なら、学問、芸術における自己満足は、富における貪慾と同様、非難に値するものだからである。」¹⁹⁾

ハーリーは、伝統に追従する詩作態度を批判し、ガザルの内容を可能な限り豊富にするよう説いたが、ガザルで使われる言葉に関しては、新しい言葉の導入も必要であるが、ガザルにはガザル独特の言葉があるので、「表現法に急激に大きな変化の生じることのないような方法、それにもかかわらず、ガザルにあらゆる思想が見事に表現され得るような方法を何かとる必要がある」と述べ、伝統を尊重する態度を示している。

ハーリーによれば、人々の慣れ親しんでいる言葉を一挙に変えることなく内容を豊富にしていくことこそ、「ナチュラルな詩」をインドに普及させる最良の道なのである。

「我が国にナチュラルな詩を普及させるためには、ガザルにあらゆる種類の興味深くて素晴らしい思想を盛り込むこと、ガザルを人間感情のすべてを表わす手段とすること、そして、にもかかわらず、一見ただけでは新奇で変わっているようなものには見えないような形式によってガザルを生み出すこと、——以上のこと程良い手段は他にはない。」

このようにハーリーは、詩的伝統の破壊ではなく、詩的伝統に立脚した詩の改革を目指していたのであった。²⁰⁾

結語

「詩序論」は、マコーレー、サミュエル・ジョンソン、アフマド・カーン、イブン・ラシーク²¹⁾等の影響下に書かれた、ウルドゥー文学における最初の近代的な文芸理論書として有名である。²²⁾

「詩序論」の重要な特徴をいくつか挙げるならば、次のようになろう。

1. 露骨に文学の功利主義を標榜してはいないが、文学の社会に対する影響力や文学の社会的責任を問題にし、いわゆる「人生（社会）のための文学」(adad ba-rāe zindagī)の視点を提起した点。
2. 東西の文学に対する偏見のない態度や伝統に立脚した文学改革を目指す姿勢などにバランスのとれた近代主義の精神が見られる点。ハーリーの文学観は、西欧文化との接触によって生じた、インド・ムスリムの文学上の、そしてひいては思想上の問題に対する一つの明快な解答となっていると言えよう。
3. 言語対立が深まりつつある時期に、ウルドゥー語の重要性を強調しつつも、ヒンディー語やサンスクリットに偏見のない目を向けている点。²³⁾

従来、文芸理論としての側面からのみ問題とされることが多いが、「詩序論」は思想的、政治的にも重要な問題を含んでいるように思われる。

(ハーリーの詩業や思想の詳しい検討は、機会を改めて行なうことにしたい。)

註

- (1) ハーリーの父方の先祖はアンサル(anṣār)で、13世紀にヘラートからインドに移住した。(アンサルとは、移住して来たイスラームの預言者ムハンマドを助けたメディナの住民のこと。)母は預言者ムハンマドの血統を引いていた。
- (2) この時代に学んだのは、アラビア語文法、論理学、ハディース(預言者ムハンマドに関する伝承)などである。
- (3) これは Tarjumah-e Ḥālī の名で知られている。
- (4) Majmū'ah-e nazm-e Ḥālī 序文。
- (5) 同上。
- (6) 『婦人の集い』執筆に対し、インド総督ノースブルックはハーリーに報奨金400ルピーを与えた。
- (7) アフマド・カーンはデリーの没落貴族の子として生まれた。21才の時、イギリス東インド会社に就職し、「大反乱」以後も、1876年まで官職にあった。1878年には立法参事会参事となり、1888年には Knight Commander of the Star of India の称号を授けられた。

- (8) ハーリーはアリーガル大学の理事でもあった。
- (9) Wahīd Qureshī, ed., *Muqaddimah-e shi'r-o-shā'irī*, Lahore, 1953, P.45 を参照。
- (10) 『アリーガル・インスティテュート・ガゼット』は科学協会(Scientific Society)の機関誌で、アフマド・カーンが編集にあっていた。1866年創刊。

科学協会は、アフマド・カーンの指導の下に、新知識の普及を主な目的として、1864年、ガーズイーブルに設立された。同年、アフマド・カーンのアリーガル転任に伴ってアリーガルに移転。

- (11) この詩は、普通、単に「ハーリーの六行詩」(Musaddas-e Ḥālī)と呼ばれている。

尚、この詩の翻訳が現在進行中である。

加賀谷寛 「ハーリー作『イスラームの盛衰』の本文(ローマ字訳)・訳注(その一)」(『大阪外国語大学学報』第60号、1982年、所載)。

- (12) 「イスラームの盛衰」初版序文。
- (13) ハーリーの書いた伝記については、下記論文を参照されたい。
鈴木斌 「ウルドゥー伝記文学の発展と傾向 [I]」(『東京外国語大学論集』第15号、1969年、所載)。
- (14) ハーリーが「詩序論」執筆を思い立ったのは1882年である。

「私は長いエッセイを、ムスリムの詩について書こうと思っています。その中ではジャーヒリーヤ時代(イスラーム出現以前の時代—引用者註)から今日までのムスリムの詩の実態が描かれ、アラビア語、ペルシア語、ウルドゥー語の三つの言葉の詩について検討が行なわれるでしょう。その目的は、きわめて俗悪、有害なものとなったウルドゥー詩の改革方法について述べることで、そして、詩がもし立派な原則に基づいているならば、如何に民族(もしくは宗教集団 原語 qaum—引用者註)や祖国に利益をもたらすことができるか、ということを明らかにすることです。」(1882年1月9日付書簡)

- (15) 前註及び資料を参照。
- (16) Muḥammad Ibrāhīm Dhauq (1789—1854)。ムガル朝末期の宮廷詩人。
- (17) ルバーイー(rubā'i 定型四行詩)やキトア(qit'ah 断片詩)はガザルに付随するものと考えられている。また、マルスィヤ(marṭhiyah 哀歌)はカスィーダと一緒に論じられている。
- (18) 神秘主義詩では、男女の恋愛に仮託して、人間と神との愛が歌われた。
- (19) ハーリーは他文学の批判的摂取を目指していた。『ガーリブ追憶』の中で彼は次のように述べている。

「確かに英文学の進歩は完成の極に達しており、我々の文学はそのおかげで少し前から前進し始めた。しかし、英語から如何なることを学び取るべきであるか、そして自分たちの昔の東洋文学から何を学ぶべきであるか、ということの人々が理解しない限り、我々の文学は真の進歩からは見放されたままであることであろう。」

- (20) ガザル以外の詩形に関する、特に留意すべきハーリーの見解としては、次のものがある。

1. 当人や人々の導きとなるように、優れた人物を称賛する詩を作るのは、詩人の務めである。(カスィーダについて)

2. カルバラーの地で預言者ムハンマドの孫、シーア派第3代イマーム（最高指導者）フサインとその一行がウマイヤ朝軍に殺害された事件、—いわゆるカルバラーの悲劇—これだけを歌っていてはならない。（マルスィヤについて）

3. 韻の制約をあまり受けず、同一の内容を続けて歌うことができるので、最も有益な詩形である。（マスナヴィーについて）

(21) Ibn Rashīq (1000—1064 一説によると980—1070)。イブン・ラシークについては下記の書を参照。

Vicente Cantarino, *Arabic Poetics in the Golden Age*, Leiden, 1975.

(22) 英文学に関するハーリーの知識は不正確なもので、アフサン・ファールキーは、「英文学を知る者は安心して読むことができない」と評している。もっとも、彼は「詩序論」を高く評価している。下記の書を参照。

Muhammad Aḥsan Fārūqī, *Urdū men tanqīd*, Lucknow, 1974.

(23) 「詩序論」の他に、言語対立に関するハーリーの見解をよく示すものとして、ウルドゥー詩人列伝 *Khumkhānah-e jāvid* の書評（1910年）がある。

この書評の中でハーリーは、サンスクリットやブラジ・バーシャー (Braj bhāṣā) に対するムスリムの姿勢を批判して次のように述べている。

「インドに住んでいながら、ムスリムがサンスクリットに対して、あるいはブラジ・バーシャーに対してすら無関心でいたり、嫌悪感を抱いたりするのは、全く、『川にいながら鰐を憎む』ようなものである。」

（ブラジ・バーシャーはヒンディー語の一方言。ハーリーは、ウルドゥー語の基盤となっているのはブラジ・バーシャーであると誤解している。）

資料

『ハーリー詩集』に、「詩への呼びかけ」(shī'r ki ṭaraf khitāb) と題された、ハーリーの文学（詩）観をよく示す短い詩があるので、それをここに訳出しておくことにしたい。

詩への呼びかけ

おお詩よ、魅力的でなくても悲しむことはない。

しかし、感動的でなければ憐れむべきこと。

全世界が上辺の技巧に魅せられていようと

その平易さを捨ててはならぬ。

お前に誠実さの美德があるならば

時代の称賛などを求めることはない。

自分の美を世界に示すことができないならば

自分自身を見、自分自身を誇るがよい。

お前は真理の大海に波浪を起こした。

お前は虚偽の船を沈めるだろう。

嘘言が詩の教義であった時代は去った。

礼拝の方角がそちらだと言うなら、礼拝など無用。

見識ある者の眼に大切な物と映り続けたいならば

見識のない者たちと交際などしてはならぬ。

お前の一風変わった葉に人々が眉をひそめようとも

人々は無力なのだ。お前は救済者。

静かにその誠実さによって人々の心の中に浸透するのだ。

まだ目立つ旗を掲げてはならぬ。

無知な者たちにそっと道を告げてやるがよい。

もし預言者キズルの長命を望むならば。*

名誉の秘密は国への奉仕の中にある。

奴隷アイヤーズの姿をしていても、自分はマフムード王であると思うがよい。**

おお詩よ、正しい道に就いたのであれば

もう道の起伏など見てはならぬ。

新しい世界を征服せねばならないのなら、漕ぎ出さねばならぬ

船隊から離れ、自分の船を。

貞実は尊重される。しかし辱めの後に。

そうでないならば例外的なことと思うがよい。

評価してくれる者を天恵と思うのだ。

ハーリーはお前を誇りとする。お前はハーリーを誇りとせよ。

* キズル (Khizr) は預言者で、道に迷った旅人の道案内をすると信じられている。また、キズルは生命の水 (ab-e hayāt) を飲み、不死となったと言われている。

** マフムード (Maḥmūd) はガズナ朝の王。アイヤーズ (Aiyāz) はマフムードが寵愛した美男奴隷。